Solan Primary School
4th grade news letter
Venture Fourth
128
2023.Nov.9

「終わり」を考えること

　吉賀先生の図書の時間。最近は、物語探究プロジェクトに関連して、「命」に関係する様々なお話を読み聞かせてもらっています。
　先週に引き続き、昨日もまた素敵な一冊を紹介していただきました。
　タイトルは「わすれられないおくりもの」。

読み聞かせの間、子どもたちはシーンとなって聞いていました。
子どもたちは、本を「読む」のではなく、その「世界を体験する」と言われています。
まさに、昨日はその「世界を体験する」時間が、豊かに流れていきました。
本のメインテーマは、「死後の世界」です。

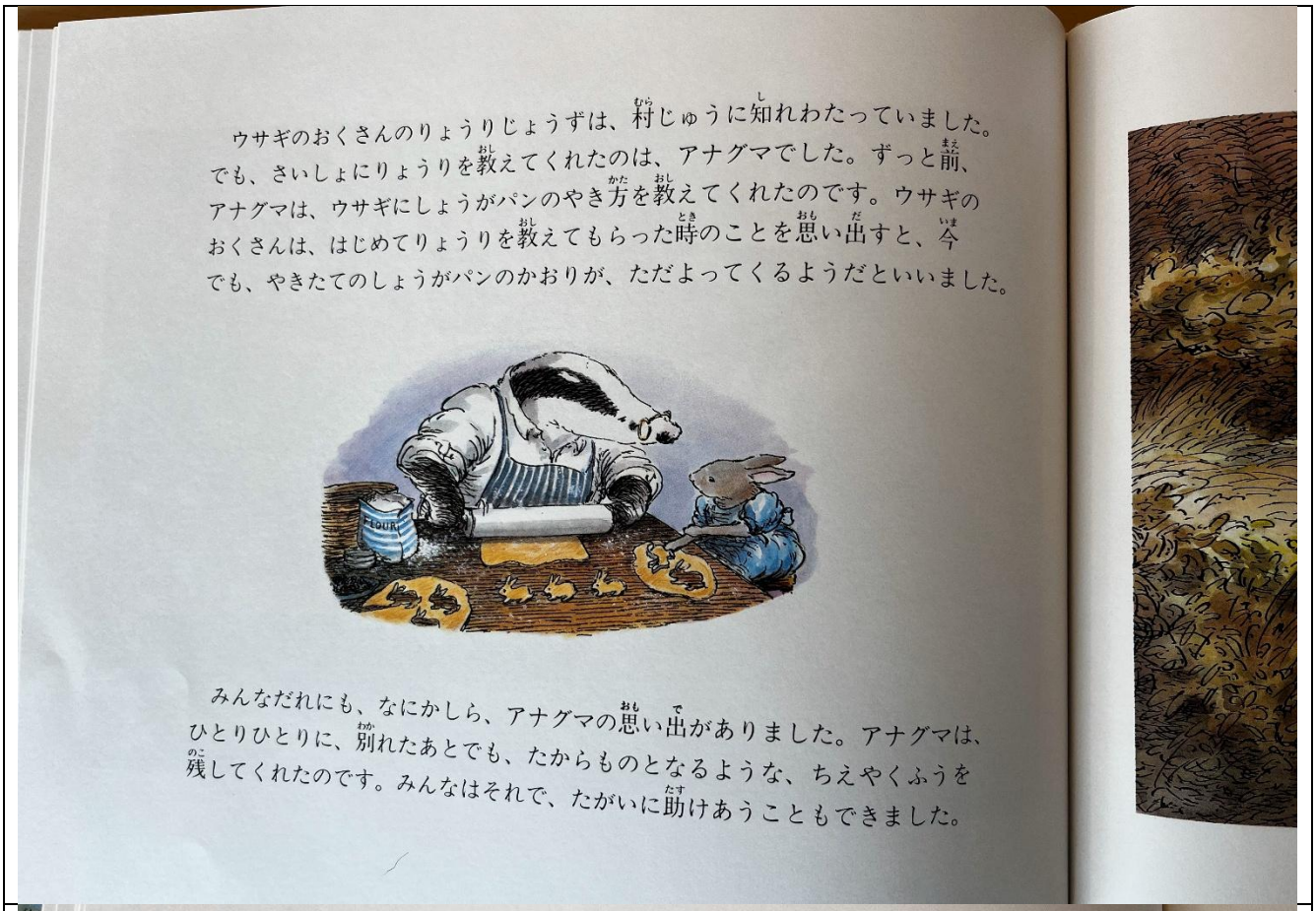
つぎの日の朝、アナグマの友だちは、みんなしんぱいしてあつまりました。
アナグマが、いつものように、おはようをいいにきてくれないからです。
キツネが悲しい知らせをつたえました。アナグマが死んでしまったのです。
そして、アナグマの手紙を、みんなに読んでくれました。

長いトンネルの　むこうに行くよ　さようなら　アナグマより

森のみんなは、アナグマをとても愛していましたから、悲しまないものはいませんでした。なかでもモグラは、やりきれないほど悲しくなりました。

死について考えることは、命について考えることでもあります。
まさに、今プロジェクトの中で取り組んでいる「一つの花」にも強く関連するテーマです。
どう生きるか、を考えることはすなわち、どのように人生を終えるのかという死の瞬間を考えることでもあるからです。
人は、必ず死にます。
そのテーマが、国語や道徳の中ではっきりと登場し始めるのが、小学校３・４年生という中学年でもあるのです。
そうした概念的な学びができるようになってくる発達段階に至るのがこの年齢であることがその理由なのでしょう。
「わすれられないおくりもの」は、死というものの悲しさを優しく伝える

と共に、「アナグマが何を残してくれたのか」という見えなくとも確かに存在するものについてスポットをあてた作品でした。



ウサギのおくさんのりょうりじょうずは、村じゅうに知れわたっていました。でも、さいしょにりょうりを教えてくれたのは、アナグマでした。ずっと前、アナグマは、ウサギにしょうがパンのやき方を教えてくれたのです。ウサギのおくさんは、はじめてりょうりを教えてもらった時のことを思い出すと、今でも、やきたてのしょうがパンのかおりが、ただよってくるようだといいました。

みんなだれにも、なにかしら、アナグマの思い出がありました。アナグマは、ひとりひとりに、別れたあとでも、たからものとなるような、ちえやくふうを残してくれたのです。みんなはそれで、たがいに助けあうこともできました。

さいごの雪がきえたころ、アナグマが残してくれたもののゆたかさで、みんなの悲しみも、きえていました。アナグマの話が出るたびに、だれかがいつも、楽しい思い出を、話すことができるように、なったのです。

あるあたたかい春の日に、モグラは、いつかカエルと、かけっこをした丘に、登りました。モグラは、アナグマが残してくれた、おくりもののおれいがいいたくなりました。

「ありがとう、アナグマさん。」

モグラは、なんだか、そばでアナグマが、聞いていてくれるような気がしました。

そうですね・・・きっとアナグマに・・・聞こえたにちがいありませんよね。

その後、みんなで落ち着いた雰囲気の中で話しました。
「終わり」というのは、何も死だけではありません。
「別れ」も一つの終わりですし、「区切り」も一つの終わりです。
そういう意味では、４－１の終了も一つの終わりと言えるという話から、「どんな風にして４年生を終えたいか」「どんなものを残したいか」という話につながっていきました。
図書の終わりの時間、マナポートにそれを各自で記入して授業を終えました。
終わりを考えることは、今を考えることでもあります。
死を考えることは、命を考えることでもあります。
４ 年生の終わり方を考えるみんなの姿はいつになく真剣で、ぐっと大人びた雰囲気が教室には漂っていました。
このクラスを、この一年を、どのように終えたいかを考えると、今の過ごし方が変わってきますね。
ぜひ、自分の思い描いたゴールに向けて、ふさわしい今を積み上げていきましょう。

☆↓読者ページはこちらから↓☆ご意見ご感想など気軽にお寄せください

https://docs.google.com/forms/d/1qqf4cPLcjpcWaimWdu-6lFM73JahODYK4ROldg7jLxM/edit